

王立地理学協会とイラン

—1830年代から1840年代にかけてのイランに関する
西洋の地理知識と言説の研究—

吉 田 雄 介

The Royal Geographical Society and Iran: Surveying Western geographical knowledge and discourse about Iran, 1830s–1840s

YOSHIDA Yusuke

This paper uses *The Journal of the Royal Geographical Society of London (JRGSJ)* to ascertain Western geographical knowledge and discourse about Iran in the mid-19th century. The Royal Geographical Society of London was founded in 1830 to research and explore regions unknown to Europeans.

The first question this paper seeks to answer is who authored articles concerning Iran in *The Journal* in the 1830s and 1840s. The second question dealt with is the academic level of these papers. Analysis indicated that most of the authors were officers in the East India Company (E.I.C.) army who lived in Iran for several years and traveled to remote districts of the country to collect hard data in the field. During their marches or travels, they described their everyday observations in their journals. Articles by the same authors in the *JRGSJ* were somewhat similar in style because they extracted from their journals but did not offer analysis. However, the number of authors who were not officers or agents of the E.I.C. continued to increase, and the style of articles changed after Vol. XI. The main purpose of articles by these new authors was to search for ruins in Bible lands (i.e. Kurdistan and Mesopotamia). Therefore, these articles featured more analysis and included supplementary explanations, unlike their predecessors.

1. はじめに

本稿は、ヨーロッパの影響力の拡大および地理的知識の深化を、1830年代～40年代のイランを事例に検討する。具体的には、1831年創刊の王立地理学協会雑誌 (*The Journal of the Royal Geographical Society of London*; 以下、*JRGSJ*) に掲載されたイラン関係論文の分析から検討する。この学会誌には、イランを含む世界中の旅行日誌が収められている。

ところで、地理学者 Driver は、*Geography Militant Cultures of Exploration and Empire* の冒頭で、『悲しき熱帯』を引用しつつ、「20世紀のモダニティの産物としてレヴィ=ストロースが提起した冒険的な探検家と科学的旅行者の区別は、実際にはもっと長い歴史がある (2001: 1)」と、レヴィ=ストロースの見解を訂正している。しかし、探検家とも研究者とも区別のつけ難い多様な人間が、イランに関する地理学というディシプリンにおける知 (geographical knowledge) を作りあげてきたのもまた事実である。

あるいは、カルチュラル・スタディーズであれば、地理学というが学知の表象は、決して客観的でも神の視点を持った超越的なものでもなく、当時の経済的、文化的、政治的状況、つまり大英帝国のそれに埋め込まれていることになる。サイド的な見方であれば、個人的な経験や出会いも結局は「オリエンタリズム」という陳腐なステレオタイプに回収されしまう。もちろん、それは大枠では正しいが、あまりに大雑把にすぎるだろう。ここでは、地理学というディシプリンにおいて、イラン (ペルシア) という地域が、誰によってどのように観察され、描写されたのかを具体的に検討しておく。こうした点を検討するために、本稿では、まず、執筆者のプロフィールを確認し、その上で、論文の形式と内容を吟味する。

なお、当時はまだ地名の正字法が定まっておらず、同じ論文の中でさえ異なる表記が見られる場合もある。この点、地名表記の多様性はヨーロッパ人によるイラン知識の深化を吟味する上でたいへん興味深い。ここでは混乱を避けるため現代の一般的な読み方をしておく (ただし、原文の地名を付す)。また、当時の表記ではイランではなく、ペルシアであるが、これについても可能な限りイランで統一しておく。

2. 王立地理学協会

(1) 学会の設立

王立地理学協会は、1830年にロンドン地理学協会として設立されたが、これはパリ (1821年)、ベルリン (1828年) に次ぐ世界で3番目の地理学協会であった。なお、王立地理学協会同様、19世紀はじめにイギリスでは多数の専門的な協会の設立が相次ぐが、地理学の隣接分野としては、

1807年の地質学協会、1820年の王立天文学協会、1823年の王立アジア協会などの設立が先行している (Brown, 1980 : 3)。

地理学協会設立の目的は、①会員のために、新しい、興味深く、有益な事実と発見を収集し、記録し、要約し、刊行すること、②地理学関連の良書や地図を収める図書館を整備すること、③旅行者のために地図を提供すること、④旅行の指導と地理的調査の支援を提供すること、⑤世界各地に設立された地理学協会と交流を持つこと、⑥地理学の隣接分野の協会と交流を持つこと、であった (JRGSL, Vol. 1, 1831 : vii-viii)。要するに、世界中の地理情報を記録し、収集し、提供することにあった。

学会誌は、「論文 (Papers read before the Society ないし Article)」、「分析 (Analyses, &c.)」、「雑報 (Miscellaneous)」の3つの区分に分かれている。なお、「分析」の区分には書評などが掲載されることが多く、「雑報」の区分についてはその名の通りさまざまな内容が掲載されるが、論文よりも短い旅行日誌の抜粋などが掲載されることも多い。

本稿では、さし当たって「論文」の区分のみを検討するが、イラン関係の掲載「論文」については、1833年の第3巻になって初めて「アーゼルバイジャーとカスピ海沿岸部の巡歴の日誌」が掲載された。ちなみに、この第3巻に掲載された他の論文は、以下の通りである (表1)。このように、北極探検や南太平洋の絶海の孤島である英領ピトケアン諸島、ギリシアのアンプラ

表1 王立地理学協会雑誌、第3巻 (1834年)に掲載された論文

- 「アーゼルバイジャーとカスピ海沿岸の巡歴の日誌 (Journal of a Tour through Azerdbijan and the Shores of the Caspian)」
- 「グアテマラのウスマシタ河の説明 (Description of the River Usumasinta, in Guatemala)」
- 「ロス大佐の調査において北極探検で採用されたルートの報告 (Account of the Route to be pursued by the Arctic Land Expedition in Search of Captain Ross)」
- 「アフリカ西海岸のガンビア河とカザマンス河の想像上の合流点 (Supposed Junction of the Rivers Gambia and Casamanza, on the Western Coast of Africa)」
- 「1830年に行われたアンプラキア湾での観察 (Observations on the Gulf of Arta, made in 1830)」
- 「東フォークランド島の報告 (Account of East Falkland Island)」
- 「1832年9月7日のモーリシャスのピーター・ボッテ山登頂の報告 (Account of the Ascent of the Peter Botte Mountain, Mauritius, on the 7th September, 1832)」
- 「南極海での近年の発見 (Recent Discoveries in the Antarctic Ocean)」
- 「インダス河に関する地理学的回顧の内容 (Substance of a Geographical Memoir on the Indus)」
- 「ピトケアン島人についての近年の報告 (Recent Accounts of the Pitcairn Islanders)」
- 「1830年の太平洋におけるセリンガパタム号の船上に残された私的な日誌からの抜粋 (Extracts from a Private Journal kept on board H.M.S. Seringapatam, in the Pacific, 1830)」

キア湾あるいはアフリカや南米などイランを含む世界各地の地理論文が掲載され、世界の海を支配した当時のイギリスの力が浮かび上がる。

なお、創刊巻から10巻までに掲載されたイラン関係の論文は、12本にすぎない。しかも、初期には、先述のモンティースの旅行日誌が掲載されたのみである。イラン関係の論文掲載は増加するのは第8巻以降である（表2）。

表2 王立地理学協会雑誌に掲載されたイラン関係論文（1830、40年代）

番号	氏名	論文名	掲載年、巻	軍人	日誌形式か否か?	日誌で触れている部分
①	Monteith, W.	Journal of a Tour through Azerbaijan and the Shores of the Caspian, pp. 1-58.	1833, Vol. 3	○	△	
②	Kempthorne, G. B.	Notes made on a Survey along the Eastern Shore of the Persian Gulf in 1828, pp.263-285.	1835, Vol. 5	○	×	
③	Morier, J. J.	Some Account of the I'liyáte, or Wandering Tribes of Persia, pp. 230-243.	1837, Vol. 7		×	
④	Todd, E. D'Arcy	Itinerary from Tabriz to Tehran, via Ahar, Mishkin, Ardabil, Talish, Gilan, and Kazvin, in 1835, pp.29-39.	1838, Vol. 8	○	○	1836年12月27日 タブリーズ発、テヘランまで
④	Todd, E. D'Arcy	Memoranda to accompany a Sketch of part of Mazanderan, &c., in April, 1836, pp.101-108.	1838, Vol. 8	○	△	日付はないが、1836年5月に作成したマーザンデラーンの地図作成のために方角と距離を計測した旅の説明
⑤	Shiel, J.	Notes on a Journey from Tabriz, through Kúrdistán, viá Ván, Bitlís, Sé'ert, and Erbil, to Suleimániyeh in July and August, pp.54-101.	1838, Vol. 8	○	○	1836年6月15日 タブリーズ発、クルディスタンを旅行し、8月21日スレイマニア着（その後、タブリーズに帰還するが日誌ではほとんど触れず）
⑥	Thomson, W. T.	An account of the Ascent of Mount Demávend, near Tehrán, in Sepenmber, pp.109-114.	1838, Vol. 8	○	△	
⑦	Whitelock, H. H.	Descriptive Sketch of the Islands and Coast at the entrance of the Persian Gulf, pp.170-184.	1838, Vol. 8	○	△	
⑧	Fraser, J. B.	Notes on the Country lying between the Meridians of 55° and 64° East, and embracing a section of the Elburz Mountains in Northern Khorásán, pp.308-316.	1838, Vol. 8		△	前半はエルブルズ山脈の説明であるが、後半は、日付入りの日誌形式(1834年5月30日 サゼゼヴァール出発)
⑨	Rawlinson, H. C.	Notes on a March from Zoháb, at the foot of Zagros, along the mounatins to Khúzistán (Susiana), and from thence through the Province of Luristan to Kirmansháh, in the year 1836, pp.26-116.	1839, Vol. 9	○	△	前半はゾハープ地区の説明、後半は1836年2月14日ゾハープ出発の日誌形式（ただし、補足の説明が相当入っている）
⑨	Rawlinson, H. C.	Notes on a Journey from Tabriz, through Persian Kúrdistán, to the Ruins of Takhti-Soleimán, and from thence by Zenján and Tárom, to Gilán, in October and November, 1838; with a Memoir on the Site of the Atropatenian Ecbatana, pp.1-64.	1841, Vol. 10	○	○	1838年10月16日 タブリーズ近郊のイギリスのキャンプを出発、11月16日ザンジャン近郊まで
⑨	Rawlinson, H. C.	Memoir on the Site of the Atropatenian Ecbatana, pp.65-158.	1841, Vol. 10	○	×	

⑩	Gibbons, R.	Routes in Kirmán, Jebál, and Khorásán, in the Years 1831 and 1832", pp.136-156.	1841, Vol. 11	○	○	1831年 3月16日 カーシャーン 出発、1832年 1月12日 マシャッド着
⑪	Layard, A. H.	Ancient Sites among the Bakhtiyari Mountains. Extracted from a communication by A. H. Layard, Esq. With Remarks on the Rivers of Susiana, and the Site of Susa, by Professor Long, V. P., pp.102-109.	1842, Vol. 12		×	
⑫	Bode, C. A. de	Extracts from a Journal kept while travelling, in January, 1841, through the Country of the Mamásení and Khogilú (Bakhtiyári), situated between Kázerún and Behbehán, pp.75-85.	1843, Vol. 13		○	1841年 1月21日 シャーブルの彫像がある洞窟、1月25日 ベーバハーン着 (カーゼルーンの町とシャーブルの遺跡は省略)
⑫	Bode, C. A. de	Notes on a Journey, in January and February, 1841, from Behbehán to Shúshter; with a Description of the Basreliefs at Tengi-Saulek and Mál Amír; and a Digression on the Jaddehi Atabeg, a Stone Pavement in the Bakhtiyári Mountains, pp.86-107.	1843, Vol. 13		○	1841年 1月28日 ベーバハーンを出発し、2月10日 シュスタール着
⑫	Bode, C. A. de	Appendix to the two preceding Papers: On the probable Site of the Uxian City besieged by Alexander the Great on his way from Persis to Susa, pp.108-112	1843, Vol. 13		×	
⑬	Forbes, F.	Route from Turbat Haiderí, in Khorásán, to the river Herí Rúd, on the borders of Sístán. Extracted from the Journals of the late Dr. Frederick Forbes, E.I.C.S., pp.145-192	1844, Vol.14		○	1841年 6月 6日 トルバテ・ハイダリイ 出発、6月26日まで
⑭	Selby, W. B.	Account of the Ascent of the Kárún and Dizful Rivers and Ab-í-Gargar Canal, to Shuster. By Lieutenant W. B. Seley, I. N., Commanding the H. C. Steam-vessel 'Assyria,' belonging to the Euphrates Expedition, in the Months of March and April, 1842, pp.219-246	1844, Vol.14	○	×	
⑪	Layard, A. H.	A Description of the Province of Khúzistán, pp.1-105	1846, Vol.16		×	

(2) 当時のイギリス・イラン関係

学会の設立された前後のイギリス・イランないしインド関係を検討しておこう。次章以降で明らかになるように、東インド会社の検討が重要になるが、本稿では最低限の検討に留める。

19世紀が始まる直前、1800年頃の世界の政治地図を素描するなら、インド亜大陸の多くはイギリスの植民地ないしその勢力圏となりつつあった。インド亜大陸の縁辺に位置するシンド、パンジャブ、アフガニスタンはインドから西進するイギリスの影響が強まり、混乱の色を深めつつあった。一方、西に目を転ずればオスマン帝国は弱体化しつつあったにせよ、一応その支配は地中海からバルカン半島、あるいはアラビア半島にまでいまだ及んでいた。北からロシアが南下し、中央アジアやカフカースの大半を領土化した結果、南のトルコやイランと勢力圏を争うようになっていた。

表3に、イギリスとイランの外交関係を簡単に整理しておいた。19世紀初頭にはフランスと

表3 19世紀前半のイラン・イギリス関係

西暦	事 項
1796	ガージャール朝成立
1801	第一回マルカム使節団
1801	フランス軍、エジプトから撤退
1804	第一次イラン・ロシア戦争（～13年）
1806	第一回フランス外交使節団
1806	露土戦争（～12年）
1807	フィンケンスタイン条約締結
1807	ガルダン將軍の軍事使節団（～9年）
1807	ハーフォード・ジョーンズ（Sir Harford Jones）、特命派遣使節
1808	第二回マルカム使節団
1810	第三回マルカム使節団
1810	ゴア・ウーズリー（Sir Gore Ouseley）、大使
1813	ゴレスターン条約締結
1814	ナポレオン退位
1814	ジェイムズ・モーリア（James Morier）、全権公使
1814	ヘンリー・エリス（Henry Ellis）、モーリアが不在時の全権公使
1826	キンナー・マクドナルド大佐（Col Kinner Macdonald）、特命派遣使節
1826	第二次イラン・ロシア戦争（～28年）
1828	トウルクマーンチャーイ条約締結
1828	露土戦争（～29年）
1833	皇太子アッバース・ミールザー没
1835	ヘンリー・エリス、大使
1836	ジョン・マクニール（John M'Neill）、特命全権公使
1838	第一次アフガン戦争（～42年）
1844	ジャスティン・シール中佐（Lieut.-col. Justin Sheil）、特命全権公使
1845	第一次シーク戦争（～46年）
1847	エルズルム条約締結
1848	ナーセロッディーン・シャー即位
1853	クリミア戦争（～56年）
1854	マーレイ（Hon. C. A. Murray）、特命全権公使
1856	英・イラン間で戦争（～57年）
1857	パリ条約成立
1858	英、インドの直接統治開始

出所：The Foreign office list and diplomatic and consular year book for 1857, 1857. および Sykes, A., A History of Persia, vol.2, 1921 などから作製。

イギリスがイランを舞台に外交戦争を繰り広げた。なお、1835年まで、イランとの外交に携わる職員 (officers) の選抜は、インド総督とインド当局によって行われたが、1836年になってホイッグ政権はペルシア事情の管理を外務省に委譲した (*Hansard's parliamentary debates*, Vol. CLVIII, 1860 : 1884)。ただし、それ以前もイギリス本国と東インド会社の間では、イラン政策に関して齟齬をきたす場合も多かった。たとえば、イランに対するフランスの影響力が強まった19世紀初頭、イギリス本国と東インド会社は二重の対イラン外交政策を行った。東インド会社からはマルコムを外交使節として都合3度テヘランに送ったが、同時期、イギリス本国政府はハーフォード・ジョーンズをイランに派遣した。ジョーンズが辞任するとウーリーズが後を引き継ぎ、その後はモーリヤヤエリスが公使を務めた (Sykes, 1921, pp. 301-310)。

こうした外交関係がイランに関する地理的な知識を深めさせ、さらにイラン関係書籍の公刊につながった。たとえば、1810年のマルカムの第三回使節団は相当な随員を従えた使節であったが、そのスタッフの中には地理学協会誌の第3巻に論文を書いたモンティースや、ポッテンガー (1816)、キンナー (1813)、マルカム (1829) などが含まれ、彼らはイランでの経験を公刊し、イランの地理を含むさまざまな情報をヨーロッパに知らしめた。

この時期、イランに長期間駐在し、しかも地理的に広い範囲を巡歴することができたのは東インド会社軍の士官らであった。皇太子アッバース・ミールザーはペルシア軍の近代化のために軍事顧問として最初はロシア人を使った。しかし、フランスが1807年にフィンケンスタイン条約を締結すると、条約に則ってフランス人士官が派遣された。そして、ナポレオンが敗れると、最終的にモンティースらイギリス人士官が代わったのである (Sykes, 1921 : 312)。

第8巻 (1838) にはイランに派遣された分遣隊関係者の多数の論文が掲載される。しかし、軍の近代化を精力的に進めたアッバース・ミールザーの時代とは異なり、1834年に派遣されたイギリスの分遣隊はイランで冷遇された。結局、1838年にイギリス公使がイランとの関係を断ち、すべてのイギリス士官が公使と共にイランを去ることになった (Sykes, 1921 : 327-328)。したがって、第8巻に複数の論文が掲載された時点では、執筆者のイランでの活動がその最終局面にあったと考えられる。

3. 初期のイラン関係論文の執筆者のプロフィール

まず、論文の内容の検討の前に、イラン関係の地理学論文の執筆者のプロフィールを確認しておきたい。この作業により当時のイラン関係の地理学論文の性格を確認することができるはずである。当時も少なくない数のイラン旅行記が出版されていたわけであるが、地理学という世界においては、どのような人物が執筆者となったのかを確認しておきたい。なお、執筆者の

番号は表2にしたがう。

(1) 最初期の執筆者

① Monteith, William (1833, Vol. 3) 第3巻に「アゼルバイジャンとカスピ海沿岸部の巡歴の日誌」を掲載したモンティース (1790-1864) は、*Oxford Dictionary of National Biography* (以下、*ODNB*, 2004) の説明では、東インド会社の士官、外交官、歴史家とされている。彼は、1809年に東インド会社マドラス工兵連隊 (Madras engineers) の中尉 (lieutenant) となったが、翌10年にはジョン・マルカムを団長とする外交使節のイラン派遣と共に、イランに渡った。

マルカムの使節団がペルシアを離れた後も、東インド会社の士官はイランに残ったが、モンティースもその一人であった。イランでは、有力な改革派の皇子アッバース・ミールザーのもとに派遣され、タブリーズを拠点に活動した。ペルシア軍のグルジア遠征に同行しロシア軍と前線で戦い、その後も1829年にイランを去るまで、何度もイラン・ロシア間やイラン・トルコ間の国境紛争に従軍し、ペルシア軍を指揮、指導した (*ODNB*, vol. 38, 2004 : 792-793)。

第3巻に掲載されたモンティースの論文には、日付が途中で数ヵ所入っているが、年度についてははっきりとした年度が書かれていない。ただし、6年前の1819年の比較で1825年という年度が記されているので、1824-25年の旅行日誌の抜粋・要約であると思われる¹⁾。

② Kempthorne, George Borlase (1835, Vol. 5) 第5巻に「1828年のペルシア湾東岸調査についての覚書」を書いたケンプソーンは、1826年にインド海軍に入隊したが、論文執筆時の階級は大尉であった (*Allen's Indian Mail, and Register of Intelligence for British and Foreign India, China, and All Parts of the East*, Vol. XIV, 1856 : 360)。論文自体は、ケンプソーンの1828年の航海の記録であるが、記述のスタイルとしては、アレクサンドロス大王の部下で、アレクサンドロスの艦隊を率いてインドからペルシア湾まで航海したネアルコス (Nearchus) と自分の航海を比較するスタイルを採りつつ、カラチからブーシェールまでの航海を記述している²⁾。なお、彼は1851年には大佐になっているが、ほとんど著述活動はしていない (*The East-India Register and Army List for 1859*, 1859 : 90)。

③ Morier, James Justinian (1837, Vol. 7) モーリヤの「ペルシアのイリヤート、すなわち遊牧部族についての報告」という論文が第7巻に掲載された時点で、すでに彼は2冊のイランの旅行記 (1812 ; 1818) とペルシアの物語を題材にした小説 (1824) をイギリスで出版していた。最初の旅行記の出版は25年前、2冊目の旅行記は19年前と古く、イタリア語やフランス語などにも翻訳された。

したがって、本稿は他の論文と記述のスタイルが多少異なる。すなわち、他の論文が旅行日

誌に近い形式を採っているのに比べ、モーリヤの論文は遊牧民 (*i'liyáte*) というテーマに沿った記述であり、しかも説明のために付した脚注の数も非常に多い。

(2) 1838～1841年の執筆者

1838年の第8巻には、イラン関係論文が6本掲載され、他にも小アジアやアルジェリア関連の論文が掲載されている。これ以前に掲載されたイラン関係論文はいずれも、掲載時を遡ること数年から20年以上前の日誌やメモ類を整理したものである。一方、以下に示すように第8巻の執筆者も、同じく東インド会社と関係の深い人物である点では共通するが、その内容は遠い過去の話ではなく2・3年前の日誌という同時代性が非常に高い。

④ Todd, Elliott D'Arcy (1838, Vol. 8) 第8巻に1835年のタブリーズからテヘランへの旅行日誌と1836年のマーザンダラーン地方の地図作製に関する論文を掲載したトッド (1808-1845) は、ロンドンにある東インド会社の陸軍士官学校を1823年末に卒業、1824年に少尉としてインドに赴任していた。1833年になってイギリスは、ペルシア正規軍に砲術を伝習するためにパスモア (Pasmore) 大佐を隊長とするイギリス士官の分遣隊をイランに派遣することを決定、トッドもその一人に選抜され、ペルシア語を学んだ。1834年にテヘランに赴任し、テヘランで砲兵隊の訓練を行った。1836年の秋には、イギリス人少将の軍事秘書としてタブリーズにおいて、イギリス人士官によって訓練されたペルシア軍を指揮した。しかしイギリス人隊長がシャアの軍隊に同行することを断り首都テヘランに戻ったため、代わってトッドが1837年1月にテヘランのイギリス公使によってホラサーン、カスピ海沿岸、ルードバール、ガズヴィーンを経由してテヘランに巡歴する旅に派遣された。また、1838年には、イギリス公使を案内して、ヘラート攻撃中のペルシア軍野営地を訪れている。その後、彼はヘラートから陸路でインドに戻った。なお、トッドは、1845年、第一次シーク戦争に従軍中に38歳で戦死している (*The Bengal Obituary or a Record to Perpetuate the Memory of Departed Worth, Being a Compilation of Tablets and Monumental Inscriptions from Various Parts of the Bengal and Agra Presidencies, 1851 : 323*)。

第3巻に執筆したモンティースらのイランでの活動が終わりしばらくしてイランに送られたのがトッドである。同時期に数名の士官がインドからイランに派遣されているが、第8巻に執筆したシールや第10巻に執筆したローリンソンもそうした士官仲間である。したがって、モンティースらの記述が過去の回顧となるのに比べ、トッドらの論文は同時代性が強い。

なお、トッドは、ペルシアに派遣される以前の階級はベンガル砲兵連隊所属の中尉であったが、ペルシアにおける特別活動に従事するために、1837年に現地での階級として少佐 (major)

に名誉進級をしている (*The United Service Journal and Naval and Military Magazine*, Part II, 1837: 429)。したがって、論文掲載時の肩書も少佐となっている。

⑤ Shiel, Justus (1838, Vol. 8)³⁾ シール (1803-71)は、第8巻にクルディスターンの旅行日誌を掲載したが、彼も1833年にペルシア軍の訓練のために東インド会社のベンガル歩兵隊から選抜されてイランに送られた一人である。ただし、1836-44年まではペルシアにおける英公使館 (legation) の公使館書記官 (secretary)、1844-54年まで特命全権公使を勤めた。なお、ペルシアに派遣される前の階級はベンガル現地軍 (Bengal native infantry) の大尉であったが、ペルシアにおける特別活動に従事するために、1837年に現地での階級として中佐 (Lieut.-Col.) に名誉進級をしている (*The United Service Journal and Naval and Military Magazine*, Part II, 1837: 429)。それ故、論文の掲載の肩書は、中佐となっている。

⑥ Thomson, William Taylour (1838, Vol. 8) 第8巻に「1837年9月のテヘラン近郊のダマーヴァンド山登山の報告」を掲載したトムソンも東インド会社から派遣された士官であった。ただ、彼の場合は、1837年6月12日にテヘランの領事館の領事館補 (paid attache) に任命されている (*The Foreign Office List and Diplomatic and Consular Yearbook for 1857*: 79)。論文執筆時のテヘランの英公使館の陣容は、トムソンの他には、公使がマクニール (Sir John McNeil)、イギリス軍部隊の指揮官がマドラス軍のシー (Benjamin Basil Shee) 中佐、先のベンガル軍のシール大尉が英公使館書記官であった。トムソンは、1837年に領事官補になったあと、1852年に領事館書記官に昇進し、1858年にはサンチアゴ (チリ) の総領事になった (*Parliamentary Papers*, Vol. VI. Sess. 1861: 483)。なお、1853年から1855年の間はテヘランの代理公使を務めている。

⑦ Whitelock, H. H. (1838, Vol. 8) 第8巻に「ペルシア湾の入口にある島嶼と沿岸の概略」を執筆したホワイトロックは、第8巻の他の執筆者と異なりインド海軍の大尉であったが、本稿の掲載以前の1837年10月26日にディスカヴァリー (Discovery) 号の船上で死亡している (*The Asiatic Journal and Monthly Register*, Vol. 24, New Series, Asiatic Intelligence, 1837: 35)。冒頭に書かれた編集の説明では、第5巻のケンプソン論文の補足になるとして、本稿が掲載される旨が説明されている。内容は、1829年のペルシア湾岸の航海日誌であるが、1821年に彼が最初にペルシア湾岸を調査したときの回想も挿まれる。

なお、この前年のボンベイ地理学協会雑誌に一文字一句違わず、ホワイトロック大尉の同じ論文が掲載されている (Whitelock, 1837)。ボンベイ地理学協会は1831年に当初はマルカムを会長として王立地理学協会の支部として設立され、1836年から協会誌の発行を開始した。ホワイトロック大尉の論文が掲載されたときもまだ支部扱いであったから、王立地理学協会雑誌に再掲されたのも不思議ではない。

⑧ Fraser, James Baillie (1838, Vol. 8) 第8巻にホラサーン北部の日記を書いたフレイザー (1783-1856)は、*ODNB* の表現では旅行家であり芸術家である。彼は1799年から1811年までは一族のサトウキビ農園の監督をするために英領ギアナに滞在していたが、イギリスに戻った後、1813年1月にインドに向けて出発した。1815年にデリーで英国陸軍のエージェンをしていた兄に会ってから、当時はヨーロッパ人にあまり知られていなかったヒマラヤの風景をスケッチ旅行した。これは、1820年にロンドンでカラーの版画集として出版された。東インド会社の外交官アンドリュー・ジュクス (Andrew Jukes) がボンベイからイランに向かうのに同行し、ブーシェールからシーラーズを経由してエスファハーンに到着したが、同地で1821年にアンドリュー氏が死去したので、フレイザーは単独でテヘラン、マシャッド、タブリーズを旅行し、ティフリス経由で1823年にロンドンに戻った。この旅行の記録を、2冊の本として上梓している (1825: 1826)。1833年に外務省はイランに対するロシアの影響を調査するためにフレイザーをイランに派遣した。フレイザーは、1833年から1835年までイラン各地を調査し、外務省にロシアの脅威に関する報告を提出すると、今度は3人のペルシアの皇子のロンドン公式訪問の案内役に任命された。この記録は1838年に出版された。また、フレイザーはたくさんの歴史小説も執筆している (*ODNB*, Vol. 20, 2004: 849-850)。

また、彼の功績としては、1834年末から35年初にかけてクルディスタンやメソポタミアを訪れ、*Travels in Kordistan, Mesopotamia, etc*, 2 vols, 1840を刊行し、当時まだヨーロッパ人にあまり知られていなかった当地の遺跡を紹介したことも重要である (Hilprecht, 1903: 54-57)。

⑨ Rawlinson, Sir Henry Creswicke (1839, Vol. 9 & 1841, Vol. 10) 第9・10巻に続けてイラン西部の旅行日記を書いたローリンソン (1810-95)は、1833年から1839年まで他の東インド会社の士官とともにイランでペルシア軍の教育を行っていたが、その傍らビーストゥーンをたびたび訪問し、アケメネス朝ペルシアのダレイオス1世が古代ペルシア語、アッカド語、エラム語の3言語で刻んだ摩崖碑文を写し取った。その内、古代ペルシア語の解説を1847年に発表している。1851年には、碑文の第三コラムの翻訳を完成している (ポテロ, 2009, 93-94頁)。第9巻に掲載された論文でも、末尾にケルマンシャー近郊のビーストゥーンを訪れた記録が記されている。後に、彼はアッシリア学の権威となるが、論文が掲載された時点では、碑文の解説はまだ終わっていなかった。

ローリンソンは、第9巻と10巻の論文を執筆した時点の階級は少佐となっているが、これは先のトッドやシール同様、イランでの特別活動に従事するために名誉進級したからである。在インド時には、ボンベイ近衛歩兵第一連隊所属の中尉であった。その後インドに呼び戻され、アフガニスタンでイギリス軍を指揮していたマックノートン (Sir W. Macnaughton) の補佐役

に任命され、1840年にはカンダハールの駐在官になった。1843年になってオスマントルコ領アラビアの東インド会社の駐在官に任命され、その翌年にはバグダードの領事に転じている (ODBN, Vol. 46, 2004 : 156)。また、下院議員 (1858、1865-68)年も務めた。

ローリンソンは、1857年時点の王立アジア協会 (The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)の4人の副会長の一人であり、評議員の一人はイラン時代の同僚のシールがつとめた。また、彼は後年、王立地理学協会の会長を務めることになる。このように、ローリンソンは軍人や外交官、政治家としてのキャリアのみならず、学者としてのキャリアも着実に積み重ねた。

(3) 11巻以降のイラン関係論文

第11巻以降のイラン関係の掲載論文はそれ以前の論文と比べ多少色合いが異なっている。また、セルビー (Selby)論文以降、1850年代初めまでイラン関係の論文は掲載されない。

⑩ Gibbons, Richard (1841, Vol. 11) ギボンズはイランに派遣されたイギリスの分遣隊の一員であった。第11巻では、アッバース・ミールザーに同行してイラン中央部からホラサーンまで進軍した日誌を掲載している。

⑪ Layard, A. H. (1842, Vol. 12 & 1846, Vol. 16) レヤードは、第12巻と16巻に、イラン西部の地理に関する論文を掲載している。ただし、第12巻の論文「バフティヤリー山地の遺跡について」は、レヤードの執筆した部分は1頁強にすぎない。

レヤードは、1839年7月にインドまで陸路で横断する旅に出発したが、出発前に王立地理学協会は彼に経由地の調査を依頼した。しかし、彼はインドに渡らず、メソポタミアで発掘調査をしていた仏領事ボッタ (Botta)に触発され、在オスマン帝国英国大使の支援を受けて、ティグリス河畔の丘を発掘し、古代アッシリアのニネヴェの宮殿を発見した。1847年になって8年ぶりにイギリスに戻ると、1849年に *Nineveh and Remains* を出版し、同年王立地理学協会からゴールド・メダルを授与された。その後も1851年までメソポタミアで発掘に従事した (ODBN, Vol. 32, pp. 915-916)。

⑫ Bode, Baron Clement Augustus de (1843, Vol. 13) 第13巻に2つの旅行日誌 (および補論)を掲載したボードは、神聖ローマ帝国の貴族の血筋であるが、長くロシアの砲兵連隊に所属した。しかし、イラン西部の旅行記を公刊した翌年の1846年10月に没している (*Men of the Time*, 1865 : 85)。

⑬ Forbes, Frederick (1844, Vol. 14) フォーブス医師は、ホラサーン地方を經由してヘラートに向かう途中に、現地で暗殺されたが、遺品である旅行日誌の抜粋が第14巻に掲載された。

⑭ Selby, William Beaumont (1844, Vol. 16) 第16巻に「カールーン河およびディーズフル河、アビー・ガルガル運河経由でシュースタールまで遡上した報告」という1842年の調査を論文として掲載したセルビーは、1830年にインド海軍 (Indian navy) に入隊したが、論文掲載時の階級は大尉であった。また、先述のローリンソンの尽力によってインド政府は、メソポタミアの調査のための委員会を編成したが、その委員の一人にセルビーが任命された (Hilprecht, 1903, p. 67)。なお、1855年に中佐になり (*The East-India Register and Army List for 1859*, 1859: 90)、その後大佐に昇進している。

第11巻以降の論文についてもギボンズとセルビーは軍人であるが、記述される地域がケルマーンやホラサーンおよびスィースターンなどイランの広範囲に渡っている。また、イランの西南部に該当するバフティヤリー地方やフーゼスターン地方の記述が増えるが、これは古代の都市スーサを含むメソポタミアの遺跡に対する考古学的な関心の高まりを示している。先のローリンソンの論文についても遺跡についての言及が多い。

(4) 小括

以上、十数年という短い期間ではあるが王立地理学協会雑誌には、14名がイラン関係論文を執筆した。これは大雑把に以下の3つの期間に内容を区分することができよう。

① イラン関係の論文は第3巻になって初めて掲載され、その後、第5巻と7巻に掲載されるが、この3本の論文は数年から数十年前の日誌を、抜粋・要約するものであった。

② ところが、第8巻には6本の論文が掲載され、しかも速報性、同時代性の高い論文であった。モーリヤとフレージャーを除き、執筆者の大半が東インド会社の士官であった。すなわち、バスモア大佐を指揮官として派遣されたイギリスの分遣隊のメンバーであった。他方、モーリヤとフレージャーについても東インド会社との関係が深いことは確かであるが、軍人ではなく、しかも王立地理学協会雑誌に執筆する以前に複数の著作を執筆しており、この分野の専門家としてイギリスのみならずヨーロッパにおいて広く認知されていた。したがって、初期の執筆者は、東インド会社の士官であれば無名な執筆者もいるが、それ以外の執筆者はイランに関する著作を複数書いて既に実績が認められた有名人であった。

東インド会社から派遣された士官たちがテヘランないスタブリーズを拠点としたため、またロシアやトルコとの緊張関係が高まった時期であったこともあって、この時期のイラン関係論文に記述される地域はアゼルバイジャンからカスピ海沿岸、つまりイランの北部ないし北西部が中心であった。これに比べると、ペルシア湾岸で活動したインド海軍の執筆者は少ない。一方、エスファハーンやヤズド、ケルマーンといったイランの中部ないし南西部の記述は見ら

れない。

③ 11巻以降は、軍人や東インド会社関連以外の執筆者も現れる。ただし、この時期になると、9巻以降のローリンソンを含め、考古学的な遺跡の踏査旅行が中心となる。聖書に登場する土地（Bible land）は中世からヨーロッパ人の関心であったが、この時期になってフランスの発掘隊やレヤードの発掘、あるいは遺跡の実地踏査によりオリエントの考古学的な知識は飛躍的に拡大し、アッシリア学が開花した（Hilprecht：1903）。

4. 論文の形式と内容

次に、論文の内容自体の特徴を検討することにしたい。地理学雑誌の掲載論文を一見してわかる特徴は、旅行日誌の形式ないしそれに類似した形式を全面的ないし部分的に採用していることである。探検と地図作成が地理学協会創設当初からの根本的な目標であったから、こうした形式が多いのはこの地理雑誌の特徴である。ただし、自然地理学者の中にはすでに当初から「旅行者の物語（travellers' tales）」的な研究に批判的な者もいた（Brown, 1980：4）。

すべての論文の内容を論ずることはできないので、ここでは旅行日誌形式の代表的な論文を検討しておく。まず、旅行日誌形式の論文は、(1)日付、(2)出発地と目的地、(3)目的地までの方位と距離が、旅行日誌の最も基本となる記載事項である。さらに、道中で観察した地形や植生、あるいは住民や農業、遺跡などの情報が記述される。

ただし、旅行日誌形式であっても、後で補足事項を補ったり、考察部分を加えて論文の体裁を整えることが多い。先の表2において「○」とした論文は、旅行日誌形式に近い論文であって、それほど補足がない論文である。「△」としたのは、日付がほとんど入っていないような論文や論文の前半ないし後半のみが旅行日誌形式になっている論文である。前者の代表は、第3巻のモンテース論文である。後者の代表は、第8巻のフレーザー論文（前半はアルボルズ山脈の説明が入り、重要な峠などが整理して説明されている）や第9巻のローリンソン論文（前半はゾハーブ地区の歴史や地理その他の説明が入る）などである。なお、ローリンソン論文は他の旅行日誌形式の論文に比べ、相当な補足説明が加えられている（途中で表なども挿入される）。

なお、第9巻以降の論文については、10年前の旅行日誌であるギボンズや旅行の途中で暗殺されたフォーブス医師を除けば、古代遺跡に関する内容が増える。旅行日誌形式であっても、ローリンソン論文のように遺跡の実地踏査であり、先行研究への言及といった補足説明が多く挿入されたり、旅行日誌とは別にアペンディクスの形式で遺跡についての考察をなすことが多い（ボード論文）。これは論文の書き手が軍人以外に変わったことも理由であろう。

以下に、旅行日誌と区分する形式は、ここでは基本的に日付が明記され、ほぼ毎日、記述が

ある場合を指す。そして、日付順に記述することで、観察した内容は空間的に構造化されることになる。

(1) 最初期の執筆者

第3号に掲載されたモンティースの論文は、

アッバース・ミールザー (Abbas Mirza) 殿下の直接の統治下にあるアーゼルバイジャン地方一帯およびギーラーン地方とカスピ海沿岸部を訪問せよとの命を受け、私はまず手始めにタブリーズ (Tabreez) とマラガ (Maraja) の間に位置するサヘンド (Sahend) という非常に高い山の頂上に向かった(1)

という一文から始まる。ただし、論文の表題に示された地域であるアーゼルバイジャンとギーラーン、アルダビールの巡歴が終了すると、当時ペルシアの国境と考えられていたアラス川の河畔まで進んだ。そして、「私の任務はここで終わった。私は、ティフリスを訪問する決心とともに、アラス川を渡った(31)」と述べて、論文の後半では、現在でいうところのアーゼルバイジャンやグルジア、アルメニアを巡歴してイランに戻っている。

具体的には、モンティースはタブリーズを出発すると、ザンジャン地方を經由し、ラシトに入った。船でエンゼリまで下ると、カスピ海沿岸を一度北上してから、再び内陸に入り、アルダビールに進んだ。春になってイランの国境とされたアラス河を渡り、ティフリス (現在のグルジアの首都トビリシ) にまで行くと、そこからクタイス経由で一度黒海沿岸まで出て、再び5月1日にティフリスに戻った。さらに、南下し現在のアルメニアのセヴァン湖周辺を調査してから、アルメニアの古都アニ (現在はトルコ領) を見学し、マクーに出て、それからオルミーエ地方まで南下し、オルミーエ湖 (モンティースは Shahey lake と表記している) をボートで渡った後、馬でタブリーズに帰還している。

モンティースの論文については、ルートに沿って各地の説明がなされており旅行日誌に近い形式ではあるのだが、日付がほとんど入らないなど他の論文ほど旅行日記の形式に則っていない。これは、調査旅行をしてから相当年月が経過したからであろうし、記載内容も一年以上と長期に渡るため多くの内容を盛り込むために、相当な編集がなされている。

なお、日付がほとんど入っていないために正確な年度が不明であるが、6年前の1819年との比較で1825年の年度に触れているので、おそらく1824年から1825年の調査旅行の情報ということになる。1813年のゴレスターン条約でイランは、グルジアおよびカフカース地方に対する権

利を放棄していたが、その後も失地回復の機会をうかがっていた。その結果、1826年から第2次イラン・ロシア戦争が始まるが、モンティースの論文はこの時期のカフカースの状況を示していると考えられる。ただし、開戦が近いという緊張感は日誌からはさほどかがわれない。なお、第2次イラン・ロシア戦争の緒戦では、イギリス人士官も加わり、イラン軍が失地を再占領したが、こうした現地踏査の経験が生かされた可能性もある（結局は、ロシア軍がタブリーズを占領して終戦）。

通った道路の状況や河川の状況、峠の説明などが基本となる記載事項であるが、モンティースの記述の特徴としては、鉛(9)、ミョウバン(16)や銅(44)、あるいは岩塩(45)などの鉱山についての記述が多く見られる。また、タブリーズを出発してすぐに、別なイギリス人が以前に探検していたサヘンド(Sahend)の山にある有名な洞窟に向かい、付近の村人を雇って洞窟の簡単な調査をしているように地質学的な興味が強い(2-3)。工兵連隊の出身であることも関係しているのかもしれない。

簡単な科学的な調査も行っており、高度を割り出すために、湯を沸かし、「…水が華氏196°で沸騰することを知り、おおよそ海拔8,500フィートであると割り出した(p.3)」というように沸点高度計で高度を割り出そうとしている。なお、巻末には各地で観測した経度と緯度を表にしたものと、モンティースがタブリーズに滞在していた間に計測した数年分の気温その他のデータを表にして添付してあり、科学的な体裁を整えている(57-58)。

また、以前にモンティースがカフカースを訪れた経験を元に、カフカースでは、ロシアとの戦争で廃墟になった村や町の記述も多い。また、グルジアについてはロシアの勢力下に入ったことで治安が安定し、交通も安全になったとしている。

モンティースのパーティーが何名であったのかは定かではないが、アルメニアでは大規模なパーティーを編成しており、次のように表現されている。

我々のキャンプでは、44人の間に7つの異なる言語—トルコ語、ペルシア語、クルド語、アルメニア語、グルジア語、レギズ語、英語—が存在するという、言語の混乱の悪くない見本を示した。天候は極めて寒く、夜には凍りついた。パーティーの多くの人間がここで、悪性胆汁症の高熱(malignant bilious fever)に襲われ、コークチャ(Koukcha)湖の湖岸まで病人を移すことがきわめて困難なため、我々はそこに10日間足止めされた。パーティーのうち2人が死亡し、10人はエレヴァンに送ることを私は余儀なくされ、彼らは回復までに数ヶ月を要した(42)

これほど深刻でなくとも、途中で何人も死者や病人が出たようである。カスピ海沿岸のギーラン地方にいた際も「今やパーティーの健康状態の危機が、できるだけ早くギーランを出ることを考慮することを私に強いた。召使いの一人がすでに熱病で死亡し、他の召使いの大半も発病の兆しを示した (p. 20)」という記述が困難さを示している。

また、パーティーの一部を分遣隊として本隊とは別に短期間の調査に派遣したり、地区ごとに地元に通じたガイドを雇って案内をさせたり、馬を雇ったり、先に荷物だけ別送している。ただし、どのようなインフォーマントを雇ったのかなどの情報はやはりそれほど明らかにされない。

記述としては、景観の審美的な描写は極力抑えられている。たとえば、「それから道路は、14マイルにわたり美しい (beautiful) 峡谷を通ってすばらしい (fine) 村落であるドゥラム (Durrum) へ続く…(13)」であったり、「清潔で美しい小都市であるラヒジャンに到着した(20)」というように風景の美しさは抑えた筆で表現されるのみである。

旅程の検討については、モーリヤなど先行研究を参考にしている。また、カスピ海の水面が過去数十年の間に上昇したり下降したことを、1746年のイギリス人のハンウェー (Hanway) や 1722年のピョートル大帝の遠征隊、1784年のイギリス人のフォルスター (Forster) に触れながら検討しており、必然的に先行研究への言及が行われることになる。

(2) 軍人による旅行日誌

軍人であっても記述内容には差異がある。モンティースと同様、速報性の高い論文ではないが、第11号に掲載された日誌形式を採る軍人の論文を次に検討する。

イギリスの分遣隊の一員としてタブリーズに駐在していたギボンズは、皇子アッバース・ミールザーの部隊がヤズドやケルマーンの反乱を鎮圧するためにタブリーズから派遣されるのに同行して、テヘラン、エスファハーン、カーシャーンに進んでいる。旅行日誌自体は、1831年3月16日のカーシャーン出発から始まり、1832年1月12日のマシャッドまでの進軍で終わっている。なお、実際にはこの後、ギボンズらのイギリスの分遣隊は1832年12月にホラサーンを離れ、1833年3月にタブリーズに帰還しているが、この部分に関しては「私の意図は、マシャッドまでの我々のルートの短い旅行記を提供するのみなので、この旅行については黙っておく(155)」としている。

ギボンズの場合は、ペルシア軍とともに治安が悪化した地区に急行したために、かなりの急ぎ足の旅であった。したがって、道中の記述は基本的に次のように、

カーシャーンからアブー・サイヤッターバード (Abú Sayyad-ábád)、東南東に24マイル。夜明け、1831年3月16日の朝に、我々はカーシャーンを出発した。12マイルのところ、貯水所を通過した。16マイルで、右手に村落、道路からおよそ1マイル。それから20マイルのところ、左手に別な村落。アブー・サイヤッターバードは大きな村落である。道路は砂地の平原を通る。左手は丘陵によって、右手は少し離れたコールド (Korúd) の山並みによって視界を画される。

3月17日—モハール (Mokhar) へ、南東微東 (S. E. by E.) に40マイル (137)

という日付、目的地、目的地までの方位と距離を中心とするきわめて簡潔な記述が続き、村落自体の具体的な説明はない。

都市の地誌的な記述については、例えば数日間滞在したヤズド市については、

25日—ヤズドへ、20マイル南東。

6マイルで、道路は果樹園 (gardens) に飾られたエスカザド (Eskazad) の美しい村を通過した。半マイル先で、ガチ (Gach) と呼ばれる別な村が目に入った。あちこちにたくさんの廃墟があった。

ヤズド市は、西方に向かって平原を境界となす山地のふもとに位置し、周囲はおよそ5マイルである。その町は、城壁があるけれども、ハサン・アリー・ミールザー (Hasan 'Ali Mirzā) によって難なく占領された。しかし、彼は、アッバース・ミールザーによる救援までアブドル・リザー・ハーン ('Abdu-l Rizā Khán) が籠城した城を攻め落とすことができなかった。城は、強固な城壁と深い溝で囲まれ、複数の公共の施設とともに、モハメッド・ワーリー・ミールザー (Mohammed Walī Mirzā) によって建設された宮殿やその地区のたくさんの有力者の住宅がある。

市外 (outertown) のバーザールは広々としているが、ハサン・アリー・ミールザーの軍によって荒らされて、当時はほぼ完全に放棄されていた。ボンベイにおけるのと同様、ここでも彼らの古代の信仰と礼拝、つまり神の象徴として火を崇拝することを固執する拝火教徒 (Gebrs) が非常に多い。たくさんのユダヤ人もいる。さまざまな絹織物、ベルベット、綿織物、ナマド (粗い毛織物)、棒砂糖云々からなるその製品はたいへん有名である。

その地はしばしば内戦の舞台となり、結果としてそれに続いて飢饉に襲れた。そしてあらゆる種類の食料が下層階級が購入できないほどに値上がりし、多数が餓死した。

アッバース・ミールザーは、知事であるアブドル・リザー・ハーンを解任すると、代わりにセガギー (Shegagi) 連隊の指揮官であるスレイマーン・ハーン (Suleimán Khán) をその都市に残した。この3日間の旅の間のすべての村落が略奪された。そして住民らは、彼らの穀物の作柄は良いものの、非常に悲惨な状態にあった。しかしながら、この地区の穀物は、その住民の消費を十分に満たせず、製品との交換に他の地域から供給される。

28日—メルヒズ (Merhis)、28マイル東南東。

我々は、この朝ヤズドを出発し… (139)

とあまり情報は多くない。さらに、執筆者の誤りなのか編集者の誤りなのかは不明であるが、メフリズ (Mehris) をメルヒズと表記したり、ナマドの説明についても不織布であるフェルトではなく粗い毛織物と誤った記述をしている。

また、調査のための旅行でないことに加え、滞在期間が短いこともあり、それほど地誌的な記述はなされない。そして、あくまで経験主義に基づく客観的な描写にとどまる。同様に、自己に対する言及はほとんど見られない。そのため、インフォーマントの姿は隠蔽され、またパーティーの人数が何名で、どのような装備を持っていたのかなどの情報も不明である。

エドニー (Edney) は、植民地インドにおけるイギリスの地図作製について分析するなかで、「地理的語りと他の旅の語り (narratives) の間には、共通するものが多い」と述べた上で、「地理的語りは、一般的な旅行や探検の報告と区別される。というのもそれは自己言及を拒むからである (1997: 65-66)」と述べている。イランに関する地理学論文でもこれは当てはまり、ギボンズの論文でも調査者の姿は明らかにされないし、インフォーマントの姿も明らかにされない。

(3) 最も純粋な旅行日誌形式の論文

最も純粋な旅行日誌形式の論文は、第14巻に掲載されたフォーブス論文といえる。というのも、執筆者が旅行の途中で暗殺されたため、残された日誌に執筆者本人が手を入れることができず、編集者である外務省が多少手を加えて掲載された極めて特殊な論文だからである。

フォーブスの論文は、(1) 編者である外務省による掲載の経緯の説明、(2) 1841年6月6日から6月26日までのフォーブス医師の旅行日誌、(3) フォーブス医師の従者の宣誓証言書の写し、(4) フォーブス医師のルートを表、(5) 編者によるフォーブス医師の暗殺の状況の推測、(6) 地図、から構成されるが、中心となるのはもちろんフォーブス自身が残した(2)の部分である。

フォーブス医師はホラサーン地方を南下し、スイースターン地方に入ったあとの1841年7月3日に暗殺されたと推測されているが、168頁および146頁の2冊の四つ折版 (quarto) のノート

が残された。彼の旅行日誌では、トレビゾンドやメソポタミア、およびテヘランとマシャッド経由でスイースターンまでの記録が残されているが、編者である外務省によれば、「しかし、ルートの記述の大半はすでにこれまでの旅行者の叙述によって知られているため…本書において提供される唯一の部分は、新しいルートでヨーロッパ人が訪れることがめったにないホラサーン南部を通る人跡未踏の土地を読者に知らせる部分である(145)」。また、「旅行者が目にし経験したものの全くの私的な記録であったため、活字化のために修正およびひょっとすると若干の注釈を必要とする(145)」としている。

この遺品である2冊のノートとは別に踏査時のメモが存在すると推測され、おそらくは踏査中はメモを取り、それを基に踏査直後に、推敲・清書し直したのがこのノートであると考えられる。

第11巻に抜粋された実際の日誌は、1841年6月6日の午後8時にトルバテ・ヘイダリーを出発して以降の記述である。フォーブス一行はホラサーン地方では、日中の暑さを避けて月明かりを頼りに、夜間に移動することが多かった。表4には旅行日誌中で触れられている道中の村落や町のなかで世帯数(家族数)まで書かれている村落や町のみを抜き出した。つまり、こうした集落は、ただ通過するだけでなく、それなりに詳しい情報を地元の情報源ないしガイドから入手し得た場所と考えることができる。ただし、村々で歓迎を受けたことを記している、住民数などの細かい情報までは書かれていない村も少なくなく、調査の難しさがうかがわれる。

表4では製造業や農業、住民のエスニシティや宗派、その他の記述のみを抜き出したが、こうしたことを中心に道中の村々の地誌的な記述がなされている。

以下にいくつか典型的な記述を抜き出しておこう。たとえば、村落の地誌的記述については、

9日—午前1時に我々の休息場所であるローシャナヴァン(Róshanáwan)に到着し、村落の周囲を取り巻く囲いの中で、冷しい空気の中、眠りについた。ローシャナヴァン村は、他の複数の村落と同様、(マシャッドの)ハズラト・イマーム聖廟の所領であり、6ないし7つの他の村落と共に、ガーエン(Káyin)のアミールに年2,000トマーン(1,000ポンド)で徴税請負いに出されている…これらの村落では、地主が収穫物(小麦、大麦および綿花)の4分の3を取り、残余が耕作者の分け前である(149-150)

というように、農業や地主・小作関係などが描写されている。あるいは、

表4 ホラサーン南部からスィースターンの集落について (世帯数が明記された集落のみ)

年月日	集落名	世帯(家族)数	製造業	主要農産物	その他
6月6日	Turbat Haideri				
6月7日	Fazlmand	40			
6月9日	Róshanáwan	40			マシャッドのイマーム・レザー廟の領地
6月10日	Delúwí	100	白綿布	絹、果実、アヘン、綿花	住民の大部分が織物工、住民の出自はアラブ族
6月11日	Kákh	300			アヘンの集散地
6月12日	Deshti Piyáz	100		果樹、絹、少量の綿花、アヘン	
6月12日	Khidri	100		少量の絹、大麦、小麦、カブ、トウゴマ	アラブ族
6月13日	Teghab	20		穀物、家畜	アラブ族
6月14日	Mohammed-abád	250		耕地は少ないが、綿作	アラブ族
6月14日	Chahak	50			アラブ族
6月15日	Shu'shú'	40		小規模な果樹園、穀物、アギ	アラブ族 (耕地は多い)
6月16日	Bhirján	4,000~5,000	毛氈、絨毯	サフラン、少量の絹	住民はペルシア人とシーア派
6月18日	Buzhd	200	粗綿布	ナツメ、ブドウ、絹、小麦、大麦、カブ、ピーツ、綿花	住民はスンニ派
6月19日	Isfizár	20			住民はシーア派もスンニ派も
6月20日	Furk der-miyán	200	少量の白木綿	クルミ、果実、ゼレシュキ (ヘビノボラズ)	ホラサーンで最も堅固な砦、住民はスンニ派
6月20~21日	Tabas				フルクに次ぐ堅固な砦、住民は遊牧民とペルシア人
6月21日	Mohammed-abád	60			住民は遊牧民
6月21日	Destgird	40			住民は遊牧民
6月21日	Rúzah	20			住民は遊牧民
6月22日	Derah	250	少量の白木綿	少量ではあるが綿花、カブ、穀物、果樹、アギ	住民はペルシア人シーア派

出所：Forbes, F., Route from Turbat Haideri, in Khorásán, to the River Heri Rúd, on the Borders of Sistán, *JRGSL*, Vol.14, 1844, pp.145-193 より作製。

デッラ (Derah)ないし一般的にはデッラヒー (Derahi)と呼ばれる村落は、ペルシア人シーア派の250家族程度から成り、最も屈強で、精力的で、勇敢な歩兵300人をその地方に供給し得る。その村は、裸地の石灰岩の丘の南麓に位置し、荒廃した砦の上であり、少数の果樹園と穀物畑がある。その主要な産物は、量は少ないけれども、綿花とカブであり、それが何ヶ月にもわたって主食となる。東北東2ファルサング(7マイル)ほどのところに、枝村としてラームー (Lámú)という小集落がある。ここでは、少量の粗いキャラコ以外、何も製造されない。主なる訴えは、こうした環境下では一般的な事であるが、人々は何もすることがなく、非常に貧しく、不正直という悪い性格を帯びる、ということである。近隣には獵獣が豊富であり、特に野生のロバが多い。丘陵および平原の両方に相当な量のアギが生えている…(174)

と、住民の性質を含むさまざまな地誌的要素が記述されている。先述のギボンズのそれと比べると情報の詳しさが際立つ。

町の記述については、たとえば、カーフについては、

カーフ (Kákh)ないしカーグ (Kágh)の町は、丘陵地の麓の斜面に位置しており、およそ300世帯があり、内2つは大規模で立派な造りの4つのモスクを擁している。2つの学校、6つの銭湯、4つの貯水池、複数の水路(カナート)がある(153)

と客観的な記述で、その町の説明を始めている。

日誌とは別に、当時東インド会社のカンダハール駐在官を務めていたローリンソンが1841年9月25日にカンダハールで作成した「スイースターンまで故フォーブス医師に同行し、その官吏(officer)の暗殺時にその場にいたペルシア人従者(servant)の宣誓証言書(pp. 179-183)」の写しが論文に添付されているが、これによって、旅行日誌中では明らかにならない、具体的な情報収集のやり方や調査中の調査者の態度などが明らかになる。たとえば、ここからは、フォーブス医師が、ペルシア人従者2名を雇って調査旅行をしていたことがわかる。そして、この従者の宣誓証言に従うなら、治安状況を心配する地元の領主や従者らに対して、イギリス人としてのフォーブス医師の傲慢ともいえる自信ぶりが感じられる。たとえば、スイースターン行きに固執するフォーブスを説得して、翻意を促そうとした地元の有力者に対して、

「私はあなたの保証が欲しいだけだ」、「スイースターン境界まで。そこを越えれば、何が

あっても私自身の責任だ」と医師は述べ（179-180）

て、スイースターンの境界まで案内者を付けさせた。

また、

それからバルーチ族のイブラーヒーム・ハーン（Ibráhím Khán）の住むジェハーンナーバード（Jehán-abád）に…我々が到着したとき、イブラーヒーム・ハーンは不在であり…我々はジェハーンナーバードに4日間滞在し、私は人々の間で話されている多くの噂を耳にした。それは我々に警告を与えた。彼自身旅行者と主張するある男性はカラートを訪問したが、その直後にイギリス軍がインダス河を渡り、その帰還時にミフラーブ・ハーンとバルーチ族を殺戮した。スイースターンの人々によって同じ運命が予想されないだろうか、と彼らは問うた。

私は医師に対して彼らの意見を伝えたが、彼は笑って、イブラーヒーム・ハーンは親友であると言った。医師は、ジェハーンナーバードにおいて砦の図取りをして過ごした。そして、彼はこの図面をハーンに見せ…（181）

ている。当時は、東インド会社軍がカブールに駐屯していたから、住民の懸念はもっともである。一方で、フォーブスの根拠のない楽観が際立つ。そしてこうした姿は、学者として抑制された筆では描かれない側面である。なお、1838年に東インド会社の軍勢がインドを出発しインダス河を渡り、カブールに遠征した。いわゆる第1次アフガン戦争である。難なくカブール入城を果たすと、部隊の一部を残し、大多数の兵士はインドに引き上げた。残った部隊も1842年になって撤退を開始したが、帰還途中で一名を除き全滅した。引用文中のクエッタの南のカラートを訪問した現地の男性の主張する内容は、カブール入城直後に帰還した部隊が、インドへの途上でカラートのバルーチ族を攻撃したことを指しているのだと思われる。

また、旅行の遂行のために、スイースターンでは3頭のラクダを雇っていることもわかる（ただし、地元のガイドは荷物の運搬用にロバを連れていた）。暗殺犯と断定されているバルーチ族のイブラヒム・ハーンは、フォーブスを暗殺した後、2冊のノートやコンパス、アストロラーベ、武器その他の持ち物を奪ったり、破壊している（182-183）。こうした持ち物で地理的な調査をしていたことがわかる。逆にいえば、結果は記されても、調査に使用した乗り物やツールなどの瑣末な要素は日誌から排除されることが多い。

従者の証言からは、フォーブスの日常の調査活動とインフォーマントとの関係も明らかにな

る。彼はシリング（編者の注によれば、この名称は誤りとされている）の町でも精力的な調査をしており、

ここで我々は手厚いもてなしをうけ、3日間滞在し、フォーブス医師は、その地方のあらゆる部族、砦、遺跡、その他についてモハンマド・レザー・ハーンから書き留めたが、道中でも彼は同様のことを記入していた。これは、旅を通じての医師の当たり前の実践活動であった。そして、首長が彼の質問に答えるのにうんざりしていることに、そしてそうした情報を追求する彼の目的を問うことで彼の質問に応答したことに、私はしばしば気がついた。私の主人は、彼が道路に沿って旅した際に、彼の書字板（tablets）に書き留めたすべての距離を注意深くノートに記録したものである。彼はまた彼が目にした砦や村落の名称を質問し、そして彼は絶えずコンパスを、時には彼がアストロラーベと呼んだもっと大きな器具を使用していた。彼はまた時々、さまざまな砦のスケッチを書いたり図面を引き、砦に居住するハーンたちにそれらを示したが、彼らは常に不快に見えた(180)

と、従者の証言からフォーブスの日常の活動が明らかになる。インフォーマントからあらゆる情報を収集し、また自分で集めた情報が正しいかどうかを確認しているが、良く言えば無邪気に、悪くいえばあまりに被調査者を無視した行動に見える。従者は続けて、フォーブスのインフォーマントたちに対する気楽な態度とそれに対するインフォーマントの解釈についても伝える。

我々が関わった人間で、医師の旅の目的が何であるのかを理解している者は皆無だった。彼は技師だと言うものもいれば、魔術師だと言うものもいたが、大半の人間は彼をスパイとみなした、と私は考える。旅の目的を問われると、彼自身では常に、単なる気晴らしの旅（travelling for amusement）ないし巡礼の旅であると答えた。しかし、古い堀を見る楽しみのためだけに、こんな季節にスイースターンにやってくると信じる者はいなかった。彼の訪問は、政治的な状況、およびヘラートに対するイギリス軍の進撃の予想と関連づけられて一般的には推測された、と私は考える(180)

ただし、編者はフォーブスの旅行の目的を明言していないので、スパイかどうかは定かではないが、フォーブス自身の不遜な態度もあって、住民のスパイという見立ては当然であろう。

このように、宣誓証言書からは、調査者と情報提供者の関係を再考しなければならないこと

を強く知らされる。当然ながら、他の論文に関しても同じような関係が推測される。

(4) 考古学関連の論文

第9巻以降は考古学的な関心の高まりとともに、旅行日誌の形式とは若干異なる論文が増える。そして、ローリンソンも多数の先行研究を参照しているが、レヤードはローリンソン論文に触れ、その誤りを指摘している。すなわち、エラム（スシアナ）の位置を推定するための古代の比較地理（comparative geography）が争点となっている。また、ボードもローリンソン論文に触れているが、たとえば、「マル・アミール（Mál-Amír）からシェースタールへは2つの道がある…私は後者の道路を選択したが、それは日が暮れないうちに到着するためであり、同時にその地方の未知の部分を探検するためであった。一方の道路は、ローリンソンによって既に描写されている（1843：104）」と記しており、事前に先行研究でルートを詳細に検討していたことがわかる。

ローリンソン論文 第9巻と10巻に論文を掲載したローリンソンは、いずれも旅行日誌形式の論文である。しかし、先に見た論文とは大きく異なり、遺跡に関する補足の説明が多い。第9巻では、まず、イラン西部のケルマンシャー近郊のゾハーブ（Zohab）地区の地誌的な記述（支配者、税制、農産物、地理、気候など）が冒頭の数頁にわたってなされた後で、スシアナ地方（Susiana）への旅行日誌が始まる。具体的には、1836年2月14日にゾハーブのキャラバンサライを出発し、途中数日欠けるが、4月2日まで旅行日誌が続く。その後、スシアナ地方には2つのスーサが存在したと主張して、それに関する議論が数頁挿入され、再び5月16日にディズフルを出発したところから旅行日誌が再開され、5月27日にケルマンシャーに帰還している。

これらは素朴な旅行日誌ではなく、遺跡や通過した地域に居住する遊牧部族の説明や分析がかなりの分量で挿入されており、論文にする際に、旅行日誌に相当な補足説明が加えられている。ギリシア・ローマ時代の著作に出てくる古代都市スーサ（スーサン）の場所の推定が中心であり、それとの関連でストラボンやプリニウス、プトレマイオスらへの言及がなされたり、現地の遊牧部族の分類表（1839：103&107）や課税表（1839：108）が挿入されている。

レヤード論文 レヤードの論文は、第12巻と16巻に掲載されているが、第12巻の論文については1頁強という非常に少ない分量であり、その後、5頁程度のロング（Long）教授の「スシアナの諸河川とスーサの場所に関する見解」という文章が付されており、いまだ同定されていないスーサの場所について議論している。レヤードの論文では、1840年9月半ばにエスファハーンを出発し、以前に地理学協会雑誌でローリンソンが記したバフティヤリー山地のスーサン

(Susan)および他の遺跡の調査を行っている。そして、ローリンソンの記述が不十分であると述べて、複数の誤りを訂正したり、スーサンの遺跡については「ローリンソン大佐がペルシア人たちの大げさな報告によって誤らされたことに私は驚かない (p.103)」とインフォーマントの問題も挙げている。そして、スーサンと呼称される別な場所があることも発見している。

第16巻に掲載された論文もフーズスターン地方について論述したものであるが、旅行日誌形式ではなく、「政治状況と地域区分 (divisions)」、「地理」、「スシアナ (Susiana)の古代の地理に関する見解」という3つの部分に内容が分かれている。そして、「地理」の部分において、他の研究者に言及しながら、自分の実地検分を記している。

ボード論文 第13巻には、2本のボード論文が掲載されている(別に、補論的な論文も掲載されている)。いずれも1841年の旅行日誌形式の論文であり、遺跡の実地調査および現地の遊牧民の記述である。1本目が1月21日から1月25日まで、2本目が1月28日から2月10日までの旅行日誌である。

カーゼルーン (Kázarún)の町とシャープール (Shápúr)の遺跡はこれまでの旅行者によって記述されているので、私はそれらについて詳しく述べることを止めて、ヨーロッパ人旅行者にほとんど知られていない土地であるママセニー (Mamáseni)の土地 (country)に直ちに進むべきだろう。

1841年1月21日—シャープールの巨大な彫像を含む洞窟を訪ねた後… (1843: 75)

と他の執筆者同様、既知の場所やルートの記述を避けている。

ボードは1845年になって *Travels in Luristan and Arabistan* という著作を出版しているが、その一部を地理学雑誌に掲載された論文と比較してみよう。

第13巻に掲載された2本目の論文では、ベーベハーンの町でその地の知事であるミールザー・クーモー (Mírzá-Kúmó)からベーベハーン近郊の山中にある彫像の存在を聞き、実見に出かけている。現地は治安が悪いということで、ミールザー・クーモーの指示で、地元の首長から半ダースの武装した騎兵と1ダースの火縄銃と棍棒で武装した屈強な農民を付けてもらい、彼らの先導で遺跡のあるテンギ・サウレク (Tengi-Saúlek)の谷に向かった。

著書の場合は紙数に余裕があるので、ほぼ同じ文章であっても地理学雑誌の場合と異なり、頻繁に改行を行い読みやすくしている。日誌の部分については地理学雑誌に掲載されたそれとほぼ同じ文章である。ただし、遺跡についての考察や遺跡の彫像のイラストが多数挿入されている。たとえば、実際に遺跡を目にした1月29日の箇所については、①著書では、地理学雑誌

には書かれていないペーベハーンの町で得た情報としてウル村の説明が挿入されている (Bode, 1845, Vol. 1, pp. 346-348)。②1840年にハマダーンからエスファハーンに旅行した際の回想が挿入されている (Bode, 1845, Vol. 1, pp. 348-349)。③テンギ・サウレク (Tengi-Saulek) の遺跡の彫像のイラストが3枚掲載されている。④こうした遺跡の刻文がペルセポリスなどのそれとは異なるスタイルであるとして、これについてボレ (Boré, M. E.) の手紙の引用などから考察している (Bode, vol. 1, 1845 : 359-364)、という4点が挿入されている。

したがって、地理学雑誌に掲載されるのは旅行日誌の部分が中心で、考察はあまり加えられていないことになる。また、考古学や言語学は地理学とは別個の分野ということもあろうが、そうした分野の内容は省略されている。

5. おわりに

本稿では、王立地理学協会雑誌に掲載された1830年代から40年代のイラン関係の論文の執筆者のプロフィールと論文の形式を検討した。

当時イランにアクセスできた人間、すなわちどれほどの人間がイランを訪れたのかについては明らかではない。さらに、イランの訪れ、記録を残し、論文や著作の形でどれほどの情報が公開されたのは不明である。ただし、著作を残した人間はある程度、人数を把握することができる。たとえば、カーズンはイランに関する著作を残した人間をリストに挙げている (Curzon, vol. 2, 1892 : 16-18)。ただし、こうした著者のなかには、王立地理学協会雑誌に論文を書いていない人間も多い。あるいは地理学雑誌ではなく王立アジア協会雑誌など隣接分野の学会誌に書いた者も少なくない。逆に、地理学雑誌に論文を執筆しているが、著書を公刊していない人間も多い。つまり、地理学学会にアクセスできるかどうかの問題である。イランへのアクセスも地理学学会へのアクセスも当時はどちらも簡単ではなかったはずである。

王立地理学協会雑誌にイラン関係論文の執筆者のプロフィールを確認したところ、当初は東インド会社からイランに派遣された士官ないし外交関係者が中心であった。そして第8巻では、東インド会社からイランに派遣された士官が多数、執筆している。要するに、地理学雑誌のイラン関係論文の初期の執筆者の大半が東インド会社軍の士官ないし関係者であったが、彼らはイランに長期滞在し、広範囲の旅行が可能であった。また、第11巻以降になると、東インド会社関連以外の執筆者も現れるが、それは考古学的な踏査旅行を行う人間であった。

地域についていえば、第8巻まではイギリス人士官が駐在したイランの北部ないしペルシア湾岸に関する論文が多かった。しかし、先行研究で明らかになった地域や知見は論文にする必要がないということで、第8巻より後の論文ではイラン中央部やイラン東部についての論文も

現れた。つまり、先行研究を踏まえつつイランの地理的な情報が次第に蓄積されたことになる。そして、聖書関連の遺跡について考古学的な関心が高まったことにより、イラン西南部地方に関する論文が増加した。

論文の形式は、最初期には純粹な旅行日誌形式で、しかも速報性の高い論文は少なかったが、それでも踏査したルートごとに見聞した地誌的な記述をしている。それ以降の論文の特徴としては、速報性の高い論文を含めて、少なくとも部分的にでも旅行日誌形式を採る論文が多い。簡潔で客観的な記述がその特徴であるが、旅行の途中で暗殺されたためにほとんど手を加えることなく掲載されたフォーブス医師の論文とそれに添付されたフォーブスの従者による宣誓証言書からは、精力的にインフォーマントに聞き取りをする調査者と、自分自身の情報についてはのらりくらりと誤魔化すというインフォーマントにとっては甚だ迷惑な調査者という姿が明らかになった。

一方、1840年前後から考古学的な遺跡の踏査旅行が主流となると、旅行日誌的な形式を採らない論文が増える（論文の前半は旅行日誌形式を採るが、後半はそうでない論文も出てくる）。つまり、考古学的な考察が必要になるので、旅行日誌形式で記述するにはそぐわず、先行研究との比較や考察が記述の中心となる。そして、ボードを事例に、後に書かれた著作と比べてみると、地理学雑誌に掲載された論文と異なり考古学的な考察や他の研究者の意見などが加えられており、日誌が掲載された王立地理学協会雑誌のそれは地理学という分野に合わせた論文であることがわかる。

このように王立地理学協会雑誌におけるイラン関係論文は、東インド会社からイランに派遣された士官によってイランの地理的情報が収集された。そして、1840年前後からイラン西部の遺跡の研究者が執筆者となり、そうなることで旅行日誌の形式が変化したのである。

参考文献

- Brown, E. H. ed. (1980): *Geography Yesterday and Tomorrow*, Oxford University Press.
- Curzon, G. N. (1892): *Persia and the Persian Question*, 2 vols.
- Driver, F. (2001): *Geography Militant Cultures of Exploration and Empire*, The University of Chicago Press.
- Edney, M. H. (1997): *Mapping an Empire The Geographical Construction of British India, 1765-1843*.
- Fraser, J. B. (1825): *Narrative of a Journey into Khorasān in the years 1821 and 1822*.
- Fraser, J. B. (1826): *Travels and Adventures in the Persian Provinces on the Southern Banks of the Caspian Sea*.
- Fraser, J. B. (1838): *Narrative of the Residence of the Persian Princes in London, in 1835 and 1836*, 2 vols.
- Hilprecht, H. V. (1903), *Explorations in Bible Lands during 19th Century*.

- Kemphorne, G.B. (1857): Narrative of a Visit to the Ruins of Tahrie, the Suppsed site of the Ancient City of Siraff, with an Account of the Ancient Commerce of the Gulf of Persia, *The Transactions of the Bombay Geographical Society*, Vol.13, pp.125-139.
- Kinneir, J. M. (1813): *A Geographical Memoir of the Persian Empire*.
- Malcolm, J. (1829): *Sketches of Persia*, 2 vols.
- Monteith, W. (1856): *Kars and Erzeroum, with the Campaigns of Prince Paskiewitch, in 1828 and 1829; And an Account of the Conquests of Russia beyond the Caucasus from the Time of Peter the Great to the Treaty of Turcoman Chie and Adrianople*.
- Monteith, W. (1857): Notes on the Routes from Bushire to Shiráz, etc., *JRGSL*, Vol.27, pp.108-119.
- Morier, J. J. (1812): *A Journey through Persia, Armenia, and Asia Minor, to Constantinople, in the years 1808 and 1809*.
- Morier, J. J. (1818): *A Second Journey through Persia, Armenia, and Asia Minor, to Constantinople, between the years 1810 and 1816*.
- Morier, J. J. (1824): *The Adventures of Hajji Baba of Ispahan*.
- Pottinger, H. (1816): *Travels in Beloochistan and Sindh*.
- Sheil, J. (1838): Itinerary from Tehrán to Alamút and Khurrem-ábád in May, 1837, *JRGSL*, Vol.8, pp.430-434.
- Sheil, M. L. (1856): *Glimpses of Life and Manners in Persia*.
- Sykes, P. M. (1921): *A History of Persia*, 2 vols.
- Whitelock, H. H. (1837): Descriptive Sketch of the Islands and Coast at the entrance of the Persian Gulf, *Proceedings of the Bombay Geographical Society*, pp.1-15.
- ボテロ, ジャン (松島英子訳)、『メソポタミア 文学・理性・神々』、法政大学出版局、2009、93-94頁。

注

- 1) モンティースは、1857年になって再び地理学協会雑誌に論文を掲載しているが、これは1810年にイランに渡った際に使ったルートであるブーシェールからシーラーズまでの日誌である (Monteith, 1857)。また、彼は、イラン・ロシア戦争や露土戦争に関する著作を1856年に出版しており、その序文で1810年にベルシアに渡った経緯などを簡潔に説明している (Monteith, 1856)。
- 2) ケンプソーンは著書を書いていないが、論文は複数執筆しており、地理学関係の論文としては、ボンベイ地理学協会の学会誌にいくつか論文を書いている。そのうち、ベルシア湾関係の論文としては、ボンベイ地理学協会雑誌に古代に有力な港であったシーラーフの遺跡の探訪記を載せている (Kemphorne, 1857)。
- 3) なお、「雑報」のコーナーに、シールの「1837年5月のテヘランからアラムートとホラマーバードへの旅程」という論文が掲載されているが、こちらは1837年5月19日から6月9日までの日誌である (Sheil, 1838, *JRGSL*, Vol.8)。また、彼の妻はシール婦人 (Sheil, Mary Leonora) であり、彼女のイランについて書いた著作 (1856) は有名である。

